



卓 話



「モーツアルトを語る」 東分区ガバナー補佐 石橋 正男氏 (東京東江戸川IRC)

—昨年(2006年)はW. A. モーツアルト生誕250年に当たり、世間一般で何かとこの名前が報道されたり、また眼にする事が多かった年であった。



約2世紀半前の作曲家が何故に今もって数多く語られ、或いは演奏会等で採り上げられるのであろうか。恐らく彼の頭脳から発信された美しい(或いは心にしみる)メロディーや旋律が、人々の感性を刺激し、右脳の働きを活発化させる魔力の様な物を秘めているのではと思っている。バロック音楽の巨匠ヨハン・セバスチャン・バッハ(ドイツの生んだ3Bの一人として音楽の教科書に載せられる事が多い)は別格としても、同時代の作曲家としては、せいぜいヨーゼフ・ハイドン位が時折話題に出てくる位であろう。

彼は1756年1月27日にオーストリア中部の中都市ザルツブルグで生まれ、1791年12月4日に首都ウィーンで生涯を閉じている。わずか35年と10ヶ月という短い人生であったが、その間猛烈な勢いでその生涯を駆け抜けて、約850曲以上にも及ぶ膨大な量の作品を

残している。彼の死から約70年後の19世紀中頃に、オーストリア生まれのルートウィヒ・ケッヘルという植物学者によって、その作品が整理され、作品番号としてKVが付けられている。正式にKVのついた作品だけでも626曲にのぼっている。

彼は正式な教育を受けてない。父親レオポルド・モーツアルトから音楽のみならず、語学等々あらゆる事を学んだ。他面、彼は旅の人とも呼ばれる位、生地ザルツブルグに定着せず両親や姉達と多く旅に出かけている。生涯の約1/3に当る10年2ヶ月を旅に費やしている。その行動の範囲はイベリア半島を除くヨーロッパの殆どの国々である。多くの都市で出会った多くの人々から受けた刺激や経験が、彼の才能を一層大きく開花させたであろう事は疑いない。25才に成った1781年、ザルツブルグの領主と決別してウィーンに居を移したが、封建領主からの離別が更にその才能を羽ばたせる事に成る。作曲のみならず、弟子の養成や自身での演奏活動等、過密なスケジュールの日々を送る様になる。この頃になると、まさに我々の心の琴線に触れるものが多く作られ、磨かれていくのである。ただその溢れる才能とは裏腹に、経済的な観念のみならず、人間的な面でも若干欠如したものがあって、晩年の2~3年は経済的に極めて厳しい状況に追い込まれていく。後2ヶ月で36才を迎えようとする1791年12月にその生涯を閉じるが、野辺の送りにはごく少数の人々しか立ち会わず、又共同墓地に埋葬されたので、その遺骨の存在すら今もって不明である。